

#### 5-4 マルクスのフォイエルバッハにかんする11のテーゼの意義

##### 新しい世界観の天才的な萌芽が記録されている最初の文書

「わたくしは、これを印刷にまわす前に、1845年から46年にかけて書かれた古い原稿をもう一度さがしだして目を通してみた。フォイエルバッハにかんする章は完成していない。できあがっている部分は唯物史観の説明から成っているが、それはただ、その当時のわれわれの経済史についての知識がいかになお不完全なものであったを証明するものにすぎない。フォイエルバッハの学説そのものの批判はそのなかには欠けており、したがってこの古い原稿は当面の目的には役にたたなかった。それに引きかえ、わたくしは、マルクスの古い1冊のノートの中に、本書に付録として印刷されている、フォイエルバッハにかんする11のテーゼを見付けた。それは後の仕上げのための覚え書であり、急いで書きとめられたものであって、けっして印刷にするつもりのものではないが、しかし新しい世界観の天才的な萌芽が記録されている最初の文書として、はかりしれぬほど貴重なものである。」④-[31]全文P135（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

\*④-[30]・[31]でマルクスとエンゲルスは互いに「天才的」と認め合っている。